

# 「たくましい北方の子」を育む北方学園

～義務教育学校としての魅力～

北方町教育委員会 教育課

## 1 はじめに

北方町には、これまで中学校1校と小学校3校ありましたが、準備期間5年を経て、令和5年度から義務教育学校として北学園（児童生徒\*1057名）と南学園（児童生徒\*501名）の2校に再編し、これに町立こども園（園児\*143名）を併せて北方学園として新たにスタートしました。\*4月1日現在

## 2 開校、開園後の子どもの様子

4月が始まってすぐに、子どもたちの微笑ましい姿を見ることができました。1年生歓迎のセレモニーで、体格のいい9年生男子生徒が、ニコニコして1年生を抱っこしているのです。また、こども園を併設している北学園では、園庭から手を振る園児に、高学年が手を振り返っています。「授業中ですよ。」と、思わずたしなめたくなるころですが、これも願う姿の一つとしてみることができます。登校時には、前期課程の子と後期課程の子が手をつないでいる姿を見かけることができます。このような姿が作用しているのかもしれませんが、上級生（特に8・9年生）が下級生に優しく、温かく落ち着いた学校の雰囲気を生み出しているようです。そして、「大きくなったら〇〇さんみたいになりたいなあ。」と、小さい子が大きい子にあこがれたり目標にしたりしながら学校生活を送るという、好循環を期待しているところです。



9年生と遊ぶ1年生

## 3 北方学園の特色

北方町では、「15年カリキュラム、架け橋、北方科、ICT教育、英語教育」の5つの部会を設置し、特色ある教育を生み出しています。

### ① 幼保小中15年間の一貫教育

0歳から15歳までの一貫したカリキュラムや、文部科学省の指定を受けて幼保小の架け橋プログラムを作成し、切れ目のないように「主体的でたくましい北方の子」の育成を目指しています。教員は2年かけて作成した「15年間カリキュラム」を手掛かりに、幼保小、学年、教科等、単元や題材等の「つながり」を意識しつつ、また、校種の垣根を越えて知恵を出し合い、不断の授業改善に取り組んでいます。



15年カリキュラムをチェック

### ② 独自教科「北方科」の創設

ふるさとへの愛着を深めるとともに、未来を切り拓く力を育む独自教科「北方科」を実施しています。北方町の自然や産業といった様々な事柄を題材に、独自に作成した「北方科」の教

科書と指導案を基に、学年ごとに年間15時間を計画し、社会科や理科などの教科と結びつけながら学んでいます。時には、町内の方を講師として招いて、専門的に深く学んだり、その方の講話を通して生き方を考えたりすることもあります。教員にとっては、教科等の枠組みを超えた視点から授業を構想する力が鍛えられています。

### ③ 英語教育、ICT教育

楽しく学び合い、着実に力を付けられる教育環境を整えています。英語教育では、コミュニケーション力を伸ばすことに重点を置き、大学教授の方に指導を仰ぎながら、北方町としての「CAN DO リスト」を作成し、実践に生かしています。また、「英語フェスティバル」を開催し、英語による落語などを通して、親しみをもって英語を学ぶことができるように工夫しています。ICT教育では、主体的・対話的で深い学びを実現するツールとして、タブレットでアプリを使い、大型モニターを組み合わせたりしながら、子どもたちは積極的に自分の考えを表現して問題解決を図っています。



### ④ 教科担任制の推進

後期課程の学級担任が前期課程（主に5・6年生）の教科担任を受け持ったり、前期課程の学級担任が後期課程の教科担任を受け持ったりしています。子どもたちにとって、教科の専門性が発揮された授業を受けられることや、今まで以上にいろんな教員と関わることができることが好評となっています。教員にとっては、教科の系統性を見通すよい機会となり、これまでの小中学校の枠を超え、一つの学校ならではの魅力となっています。

## 4 今後の課題としたいこと

幼保小中職員間の連携やそれぞれが職務への理解を深めることで、子どもたちを見届け支援する体制が強化され、子どもたちの安心安全な学校生活がいっそう整います。また、多様な子どもへの理解も深まり、今まで以上に子どもに寄り添った関わりができるようになります。

これまでよりも、やることや考えることが多くなっていることもあり、例えば、これまで小学校勤務であった教員からは、「部活動の業務が苦である。」といった声上がることもあります。このように、これまでの経験にないことに出くわした時こそがチャンスと捉えるような意識の転換を図り、スキルアップからキャリア形成につなげられます。



## 5 おわりに

今後、成果と課題を整理していくこととなりますが、成果については、数値となってすぐに現れにくい側面もあります。しかし、長い年月をかけてじわじわと現れてくる子どもの15年分の姿を、北方学園では一度に目にすることができるダイナミックなところなのです。よって、1校の中で学べることも多いです。ともに経験してみませんか！

# 『あったかい言葉がけ運動』によるまちづくり

垂井町教育委員会 生涯学習課

## 1 はじめに

『あったかい言葉がけ運動』は、「全ての大人でいじめをなくす」ことを目的とした「子どもを地域で守り育てる県民運動」の一環として、学校のみならず地域全体でいじめの未然防止を推進していきこうと始まった運動です。垂井町では平成25年度から町青少年健全育成町民会議を窓口として、平成26年度には学校教育課が主管とする町道徳教育推進協議会（教育委員会、社会教育関係の各団体代表、学校教育関係の各代表により構成）も加わり、一層の活動の充実を図ることで町ぐるみで『あったかい言葉がけ運動』に取り組めるように働きかけてきました。また、安心して住みやすいまちづくりにつながるよう「あったかい言葉」を募集し、集まった作品は、町青少年健全育成町民会議及び町道徳教育推進協議会にて選考作業を行い、優秀作品を毎月の「広報たるい」に掲載するとともに、垂井町版「あったかい言葉集」を発刊し、町民に紹介しています。

コロナ禍で、思うような社会生活が営めない中でも、「人と人との身体的な距離は取るけれど、心と心の距離は密にする。」という思いを大切にしながら、活動に取り組んできました。

## 2 挨拶・声かけから始める青少年健全育成への取組

垂井町第3次教育ビジョンでは、『全ての青少年が、成長の過程を通して、周囲の人々から愛情と思いやりと責任をもって見守られ、信頼をもてる人とのつながりの中で困難を克服し、可能性を発揮できることが望まれます。そのために、青少年自身が成長していく喜びを感じることができるよう、青少年育成活動の充実や、社会全体で青少年を育成していく啓発活動の推進に取り組むこと』を育成方針としています。

垂井町では、子どもたちの「心」と「体」のバランスがとれた健全育成のために、園・学校、家庭、地域が一体となって、安全で安心な居場所を確保するなど、地域社会全体で見守り、育てる環境作りを大切にしています。

## 3 『あったかい言葉がけ運動』の推進活動の実践

### (1) 募集方法

- ① 垂井町内全小学校（7校）、中学校（2校）、高等学校（1校）、まちづくり協議会（7協議会）に作品募集及び提供に関する依頼を行う。
- ② 募集期間は、前期間（7月末）、後期間（12月末）の2回とする。
- ③ 各学校及びまちづくり協議会にて、10作品程度を選考し、教育委員会へ提供する。

### (2) 作品選考

- ④ 提供された作品は、前期は「道徳教育推進協議会」、後期は「垂井町青少年健全育成町民会議運営委員会」にて、心に残った作品及び印象深かった作品の選考を行う。

### (3) 啓発活動

- ⑤ 選考された作品中、得票数の多い作品を中心に、毎月発刊される垂井町の広報紙「広報たるい」に掲載し、広く町民に啓発する。
- ⑥ 選考された作品中、得票数の多い作品を中心に、年度末に「垂井町版 あったかい言葉がけ集」を発刊し、町内全小中学校、高等学校及びまちづくり協議会に送付し、広く町民に啓発する。

## 4 応募作品数の推移

活動を始めた平成25年度の応募作品数は1,968点でしたが、現在では、約4倍の募集作品数となっており、運動の広がりを実感しているところです。また、児童生徒数が減少する中にもかかわらず、令和元年度からの応募作品数は8,000作品を上回る数値で推移しています。令和4年度の県内における応募作品数の比較をみると、垂井町の応募作品数は、岐阜県の応募総数の

約1割、西濃地区の応募総数の約3割に達しています。

このような数値で応募作品数が推移していることは、小中学校や不破高校において日常的に「よいこと見つけ（心の花カード、ぽかぽか言葉、かがやきみつけ等）」や「〇〇さんへのメッセージ」、「ピンク・リボンデー」など、仲間を思いやり、仲間を励まし、勇気づけられた言動を奨励する取組が行われていること、また、まちづくり協議会を中心に各地域において、作品提出の呼びかけを行っていただいたことが要因だと考えています。


今後も、心が温まる心地よさや優しさが共有され、あったかい言葉がけ運動の広がりとともに、お互いを気遣い、思いやりの心をもって相手に接することのできる、心豊かな町づくりを目指していきたいと思ひます。

【あったかい言葉がけの応募作品数の年度ごとの推移】

年 度	児童・生徒	保護者・教職員・地域	合 計
平成25年度	1,611	357	1,968
平成26年度	4,045	873	4,918
平成27年度	7,659	1,031	8,690
平成28年度	9,608	1,028	10,636
平成29年度	4,989	1,324	6,313
平成30年度	6,428	1,042	7,470
令和 元年度	7,243	990	8,233
令和 2年度	6,778	1,642	8,420
令和 3年度	6,112	1,162	7,274
令和 4年度	6,888	1,234	8,122
令和 5年度	6,951	1,170	8,121

5 今後の課題

- (1) 広く多くの町民にあったかい言葉がけ運動が認知されるような啓発活動を行うことで、多くの作品提供を求め、町民全体での取組に近付けていきたいと思ひます。
- (2) 「あったかい言葉」の裏にある思いや願いをくみ取ろうとする意識をもたせたいと思ひます。ただ単に、かけてもらって嬉しかっただけでなく、その言葉の裏にある思いや願い、価値について考えることこそが本当の意味での「あったかい言葉がけ」につながるものと考えます。



**あったかい言葉がけ運動**

「たくさんのご応募ありがとうございました。ご応募の中から一部を紹介いたします。(原文のまま掲載)」

体調が悪いと、気にかけてくれる生徒の一言で、とても心が温まります。以前、喉の調子が悪かった時、「先生、声ひどいよ。大丈夫？」「もう治った？」「何人も生徒が心配してくれました。「少しよくなったよ。」とひどい声のまま返事をすると「早くよくなるといいですね」と、さらに返してくれました。周りのことを気遣う言葉を自分もかけていきたいと思ひました。【不破中教職員】

6月ごろに、放課後に学校へ遊びに行くところや、地いきの方に「こんにちは」「あいさつをしたら、「こんにちは。元気なあいさつだね」「こんなに元気なあいさつをしてくれた子、初めてみたわ。本当にありがとうね」と、とてもほめてくれてうれしかったです。改めて、あいさつはとてもいいものだと思ひました。【宮代小5年】


我が子は、登校前の班長をしているのですが、登校前の低学年の保護者の方から「この班になって、登下校中に楽しいクイズや会話をしてくれるから、楽しく登下校できるようになりました」と声をかけてもらい、我が子も頑張っているんだと嬉しくなりました。【垂井小保護者】

私は応援団に選ばれたけれど、友だちはなれなかった。でも、選ばれなかった友だちが頑張ってるから、「頑張って」と言ってくれた。そう言ってくれた友だちの分も頑張ろうと思ひました。【東小6年】

クラブで落ち込んでしまったときに、「大丈夫？」と話を聞かされた。優しく言ってくれて、気が楽になったし、その声のおかげでやる気もだんだん出てきました。頼れる仲間がいることを改めて実感できました。【府中小6年】

放課後、学校へ遊びに行く時、地いきの人が、「気を付けてね。行ってらっしゃい」と言ってくれたり、帰ってきたら「おかえり」と声をかけてくれたりするの、うれしかったです。しかも、遊びに行く時、毎回言ってくれるのでうれしいです。【表佐小5年】

令和4年度 かけてもらってうれしかった  
**あったかい言葉 X**



垂井町青少年健全育成町民会議  
垂井町道徳教育推進協議会

# 神戸山王まつりとふるさと学習

神戸町教育委員会

## 1. はじめに

神戸町は、教育大綱の目標を、「郷土愛と創造性をはぐくむ心豊かなひとづくり」とし、感動と活力のある教育を推進し、郷土を愛し心身ともに健康で創造性豊かなひとづくりを推進しています。各学校において、特色ある教育として、ふるさと学習に取り組んでいますが、神戸町教育委員会として進めている、神戸山王まつりを柱としたふるさと学習について紹介します。



## 2. 郷土愛をはぐくむ教育 ～各小学校におけるふるさと学習～

神戸町内には小学校が4つ、中学校が1つあります。神戸小学校、下宮小学校、南平野小学校は、今年度創立150周年を迎え、各校、地域住民の協力を得て、特色ある記念事業を実施しました。それぞれの記念事業を通して、子どもたちは、地域の方とつながり、学校への愛着を深めました。また、各学校においては、次のようなふるさと学習を進めています。

- ・神戸小学校 神戸山王太鼓、少年消防クラブ
- ・下宮小学校 農業体験、特産物調べ、地元につながる柳瀬打囃子
- ・南平野小学校 日比野五鳳、神戸はかせクラブ、ハリヨの飼育
- ・北小学校 歴史を学ぶ昔話調べ

どの活動も、地域の方との交流を通し、地域人材を生かした学びとなっています。また、町内の文化財を見学する校外学習では、町のボランティアガイドを活用し、その文化財についてより深く知るだけでなく、地域に生きる人々の思いに触れ、学びを深めています。



## 3. 神戸山王まつりについて

神戸町には、平安末期に始まったと伝えられる神戸山王まつりがあります。この祭りは、近江坂本の日吉大社が起源とされる神戸町の日吉神社の例祭であり、国内でもまれな勇壮かつ豪快な火祭りとして知られています。今年度は、実に4年ぶりとなりましたが、4月29、30の両日にわたって盛大に開催されました。この祭りのハイライトは、若い衆に担がれた7基の神輿が、多くの松明に照らされながら、琵琶湖に見立てた川を駆け抜ける朝渡御です。久しぶりに行われた朝渡りに、生憎の雨でしたが、集まったたくさん見物客から大きな歓声が上がっていました。



#### 4. 末永く祭りを守り続けるために

神戸町では県の重要無形民俗文化財である神戸山王まつりを、末永く後世に継承していくことを目的として、神輿の形状、構造及び神事も含めた祭りの流れ等を正確に記録保存し、かつ、祭りを町全体で盛り上げつつ、その担い手を確保するために、神戸町文化遺産活用推進事業を実施しています。実施に当たっては日吉神社、氏子会及び地元の皆様の協力の下、文化庁、県のご支援もいただきながら、継続的に講演会やワークショップを開催するなど、様々な取組を行っています。

#### 5. 町内小中学校における、山王まつりを柱としたふるさと学習の取組

町内小中学校では、この神戸町の宝とでもいえるべき神戸山王まつりをふるさと学習の柱として取り上げています。昨年度3月に神戸中学校、今年度4月に町内4小学校すべてで、氏子会の皆さんによる祭りの紹介、説明を行うとともに、実際に神輿担ぎを子どもたちに体験してもらいました。神戸山王まつりでは、神輿の担ぎ手が走りながら入れ替わるという大変珍しく、かつ、難しい担ぎ方をしますが、それを実際に児童生徒に模擬神輿で体験してもらいました。

体験会を終えた子どもたちからは、「自分の町にこんな歴史あるお祭りがあるなんて誇りに思う。」「お祭りに参加して是非おみこしを担ぎたい。」「こんなお祭りが現代まで受け継がれていてすごい。」「祭りの伝統を守っていききたい。」といった、嬉しい感想が聞かれました。

4年ぶりに行われた山王まつりでは、これまで参加したことがなかった子どもたちが参加したり、教職員が神輿の担ぎ手になって祭りを盛り上げたりしました。事前に祭りについて学び、神輿の体験をし、機運を盛り上げて当日を迎えたことは、大変効果的でした。



#### 6. ふるさと学習の意義

地方自治体や学校にとって、ふるさと学習は子どもたちの愛郷心を育み、高校、大学卒業後もできれば地元に残ってほしい、仮にいったん故郷を離れても将来戻ってきて活躍して欲しいという願いが込められています。他方子どもたちにとっても、自分たちの町にはこんな素晴らしい誇るべき伝統あるのだと、自信をもってこれからの人生を歩んでいってくれるのではないかと思います。さらに、ふるさと学習は、自分に関心のある事項について深く学ぶという、自発的な学習習慣を身に付ける一助となり、他の教科学習にも良い影響をもたらすのではないかと期待されます。ふるさとを愛し、心身ともに健康で感性豊かな子どもとして成長していってくれるよう、今後もより一層ふるさと学習を充実させていきたいと考えています。

# 人権意識の向上を目指して

## ～町内 5 校をオンラインでつないで実施するスクールサミット～

安八町教育委員会 学校教育課

### 1 はじめに

安八町には、3 小学校と 2 中学校（1 校は組合立）の合わせて 5 校がある。安八町では、「主体的に考え行動できる児童・生徒の育成」に向けて、平成 28 年より、5 校の代表児童・生徒が一堂に集まって意見交流する「スクールサミット」を実施してきた。コロナ禍で令和 3 年度は中止にしたが、令和 4 年度からは、オンラインで各校を結び意見交流することにした。各校の取組を知り、さらによりよい学校を目指して児童生徒自らが学校改革に取り組む意識を育成したいという願いで年に 1 回ではあるが貴重な機会として実施している。

本年度は、安八町内の 5 校の共通課題である「自己肯定感」の低さの打開を目指して、各学校で行っている人権教育を交流しあうことで、児童生徒自身が自分たちの学校生活を見つめ直し、自分たちの力で仲間とともに人権感覚を磨き、よりよい学校生活につなぎ、一層人権教育を活発化させていきたいと考え実施した。

### 2 令和 5 年度 安八スクールサミットの実施要項（メイン会場校：登龍中学校）

- |  |  |
|--|--|
| (1) 日時                                       | 令和 5 年 11 月 14 日（火） 15:00～16:00  |
| (2) 場所                                       | Web による開催 Microsoft Teams 内「安八町学校間 Web 会議室 1」を使用   |
| (3) 参加者（メイン会場に参加：町 PTA 連合会会長、町教育委員会、教頭、主幹教諭） | ・各校：児童生徒代表、学校職員代表  |
| (4) ねらい                                      | ・各学校の人権教育の取組を交流することで、各学校同士の連携を深め、児童生徒主体の取組の充実を図る。<br>・各学校の実態や人権教育の取組をもとに、自分たちの姿を見つめ直し、一人一人が自分の力で生きていく力を身に付ける。  |
| (5) 内容                                       | ・全小中学校で人権共通アンケートを実施した。<br>・アンケート結果から各学校の強み（良さ）と弱さを分析した上で人権の取組を行った。<br>・当日は、中学生の司会で進行し、各学校の人権教育の取組の交流と感想交流を行った。 |

### 3 各校の実践（上から順に名森小・牧小・結小・登龍中・東安中）

アンケート分析	具体的取組
・挨拶をする人を選んだり、返さなかったりする人がいる。 →仲間を大切にするために、挨拶の取組を大切にする。	○ちょぼら Friday →ちょこっとボランティアの略。毎月最後の週の金曜日に誰かのために頑張っている仲間を見つけカードに書き掲示する。 ○かがやき見つけの全校放送 →発表したい仲間を募り放送。11 月の終わりまで予約がいっぱい。 ○ひびきあい週間に向けての取組→各学級で「ひびきあい宣言」をつくる。
・仲間の良さから、友達を呼び捨てにしたり、言葉遣いが悪くなったりする。→「親しき仲にも礼儀あり」と	○2 週間ごとにテーマを与えられ各学年にいる 2 人の人権委員を中心に取り組む。テーマはぐんぐん元気・にこにこあいさつ：ぴかぴか命・どんどん読書・ほかほか言葉・もくもく掃除の 6 つをローテーション。 ○あいさつの取組では、クラスで決めためあてが 80% 達成できたたら人権の花びらを貼る。良い結果でないときは再度取り組む。

<p>あるように、仲が良いからこそ「さん付け」をして礼儀を考えるようにする。</p>		<p>○親子ふれあい人権タイム（親子でDVDを見て話し合ったり、家庭での人権宣言を決めたりする。）</p>
<p>・「うざい」「死ね」「きもい」という言葉を使ってしまう。 →相手のことを考えて、思いやりのある言葉を伝えたり、思いやりのある行動をしたりする。</p>	<p>○「ふわふわ言葉・ふわふわ行動」 →思いやりのある言葉を伝えたり、行動をしたりする。 ○「学級人権宣言」を決め宣言を実現するためのキャンペーンを行う。「ふわふわシャボン玉キャンペーン」を行う。仲間の温かい言葉や優しい行動をシャボン玉に見立てた紙に書いて広めていく。 →ひびきあい集会で交流していく。</p>	
<p>・特定の人が自分の席に触れたり、机をつけて活動することが嫌に思うたりする生徒がいる。 →差別や偏見におかしいと気付き周りに伝えられる。 ・小集団による授業において、「わからない」と言えたり、自分の意見を誰にでも伝えられたりするようにしたい。「伝える」ことにこだわる。</p>	<p>○エンジェルリング活動→仲間の良さ見つけ活動 ○学級集団エクササイズ→テーマについて話し合い、ロールプレイをして、聞き方話し方をトレーニングする。 ○自分の特性を振り返り、指定された特性に対しての色をハートの形に塗りそれを見せて小集団で交流する。（人権スタート集会）</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="481 887 928 1214">  <p>自己の特性を振り返る</p> </div> <div data-bbox="951 887 1398 1214">  <p>エンジェルリング活動</p> </div> </div>	
<p>・煌めき龍星群～煌めき認めをあたりまえに～ 無意識のうちに仲間を区別してしまうのは、相手のことをよく知らないからではないか？もっと関わりを増やし誰に対してもよさを見つける目を意識的に仕組む。</p>	<p>○良さ見つけ 第一段「煌めき認めの習慣化」 ～めざせ全校 1500 枚～（実際は 3000 枚達成） 第二段「質で感じる充実感」 ～学級一押しカード放送（委員会との連携） 第三段「本物に近づく充実期」 ～学級独自の取組など：ひびきあい集会での発表</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div data-bbox="472 1303 785 1541">  <p>目指せ 1500 枚</p> </div> <div data-bbox="472 1550 1439 1662"> <p>○「龍児新聞」生徒会による新聞を定期的に発行。新聞には、生徒会が見つけた仲間の良さを紹介する。 ○先生が見つけた龍児の煌めきコーナー</p> </div> </div>	

#### 4 おわりに

参加した児童生徒は、「よいこと見つけをしているけれど、中学校が取り組んでいる『自分には自分でも気づいていない良さがある』」ということを感じられるように内容を深めていることを知り、自分の学校でも考えていきたい」「全ての学校の発表を聞いて、安八町では『挨拶・言葉遣い』について考えていかなければいけないと分かった。自分の学校でも、相手の気持ちを考え、思いやりをもった行動をとることを、もう一度考えていきたい」と主体的な感想をもつことができた。交流を通して、さらに各校で工夫した取り組みを考え、継続的・計画的な実践につないでいきたい。



# 小中学校のあり方を考える

大野町教育委員会学校教育課



## はじめに

全国的な少子化が進む中、大野町においても人口、特に子どもの人数が減少している。こうした状況を踏まえ、令和3年度から、小中学校のあり方について検討を始めた。

小中学校のあり方についての検討は、一番には「子ども達にとってどのような教育環境が望ましいか」であるが、一方では小中学校は地域のコミュニティの核でもあるので、それら学校の持つ多様な特質などにも配慮しながら検討を進めていく必要があると考えている。

## 小中学校の現状

### ■小学校・児童数の推移・将来推計 (昭和45年～令和4年～令和16年)



昭和58年より小学校は、現在の6校体制になった。児童数は、昭和57年がピークで、ピーク時から現在までの約40年間で約1100人減少している。

令和3年度に生まれた子どもの数(出生数)は96人で、初めて100人を下回った。令和4年度は75人で、少子化がさらに進行している。

令和5年5月1日現在の児童数は1152人で、令和16年には、現在の半数以下の450

人になる見込みである。ピーク時の昭和57年から、5分の1以下の児童数になる。

施設面では、学校の小中の校舎は築後40年を経過したものが多く、老朽化が進んでおり、10年後全ての学校を同時期に建て替えることは財政的に厳しいとみている。

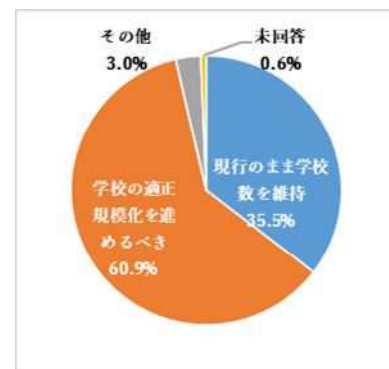
## 学校規模適正化についてのアンケートより

地域の方々の意向を把握するため、令和4年度「学校の適正規模・適正配置に関するアンケート」を実施した。

アンケート対象は、小学校児童、中学校生徒、児童生徒の保護者、教職員、未就学児の保護者、地域住民である。

■「学校の適正規模化を進めるべき」の回答率は60.9%で「現行のまま校数を維持」と回答した人を大きく上回り、特に教職員と住民は顕著であった。

■学校の規模に関しては、「1学年2～3クラス」かつ「1クラスあたり21～31人程度」という規模が適当だと考える人が最も多かった。一方で「現行のまま学校数を維持」という回答をされる方も35.5%いた。



## 子ども未来シンポジウム

学校のあり方について、町民と一緒に考え、合意形成を図りながら進めることが必要であるとの認識のもと、町民自由参加のシンポジウムを8月5日（土）開催し、町民や町内に勤める教職員、庁内の職員も参加した。

シンポジウムは、第一部の基調講演では、文科省職員で現在三重県教育委員会に出向されている早田清宏さんを講師に「子ども達にとって望ましい教育環境」についてお話いただき、第2部のパネルディスカッションでは「小中学校のあり方」についてパネリストがそれぞれの立場で考えを述べられ、多くの人が聴講した。



〈聴講者のアンケート回答より〉

地域みんなで育てる大事な未来の地域人材である子ども達の学校づくり・・・夢が膨らみ明るく楽しい気持ちになりました。あったら嬉しいなと思うアイデアも次から次へと浮かびました。

ピンチはチャンスということが、とても印象に残りました。今後、大野町は児童数の減少により、小中学校の統廃合が進んでいくであろう状況下において、主人公である未来の子ども達のために、教育のへき地はあってはならないと思う。

## 小中学校のあり方検討委員会

令和4年度より有識者や地区広報委員、PTAの代表などで構成する外部検討委員会を立ち上げ、将来の小中学校のあり方について議論を深めている。委員会では、単に学校の適正規模だけでなく、学校が地域に対して果たす役割や子どもや保護者が望む学校像等についても意見を交わし、基本方針策定に向けた答申をいただく。現段階では普通教室のエアコンリース終了が令和14年であることから令和13年頃を目途として小中学校を再編する計画で進めている。

R5	基本方針を策定	それぞれの計画を策定するための内部検討委員会・外部検討委員会を開催 R8年度ごろには、小中学校再編準備委員会・専門部会などを組織し、運営に向けての詳細を検討する予定
R6・R7	基本計画の策定	
R8・R9	配置計画策定	
R8～	基本設計・実地設計・施設整備	

## 成果と課題

シンポジウムを開催することで、町の課題を町民に周知し、自分事として一緒に考えていくキックオフの会となったが、多くの方から様々な反響があった。今後、進捗状況を町ホームページ等で丁寧に示しながら進めていきたい。学校の、児童生徒が集団の中で多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の能力を伸ばしていくという特質を踏まえると一定規模を確保することが望ましい一方で、地域のコミュニティの核としての機能により「おらが学校」との思いも根強いことから、時間をかけて合意形成を図っていくことが必要となってくる。



坂祝町のすべての子どもたちを地域総がかりで育てる

# 5年目の坂祝町コミュニティスクール

坂祝町教育委員会 教育課

## 1 5年目の挑戦

坂祝町のコミュニティスクールは、2019年4月に立ち上げ、今年度5年目を迎えた。以下のように新規の内容を掲げ取り組んだ。

### 【令和5年度の新規内容】

- コミュニティスクール新聞の発行
- コミュニティスクールの合言葉作成
- 坂祝小中学校新規転入職員の町内巡り
- 坂祝だいすきの具現  
「あいさつの輪を広げよう」

## 2 具体的な活動

### (1) コミュニティスクール新聞の発行

坂祝町のコミュニティスクールの活動を町民の方々に知っていただくために、今年度から「コミュニティスクール新聞」を月に1度のペースで発行している。自治会の回覧板に入れ、「コミュニティスクールとは何か。」から始まり、どのような活動をしているか。また、地域の方にどのように参加していただくかを発信している。

坂祝町コミュニティ・スクール新聞 令和5年10月

だいすき!

「ふるさと・坂祝学習」真っ最中

【ふるさと・絆委員会】  
《小学校》  
◆ふるさとめぐり

10月13日(金)6年生83名が坂祝町や近辺の名所をめぐりました。特に、岩谷観音では、3名の「ふるさと会」の方々とお話を伺いました。岩谷観音については小島みつえさん(勝山)から、中山道のことについては数下くに子さん(取組)から、勝山藩などについて浦田伸司さんから伺いました。子どもたちはメモをとるなどしてしっかりとお話を聞きました。お話の後は、岩谷観音の普賢にある観音像を見学しました。当日は、  
うとう峠→精沼→岩谷観音→犬山輪駒→太田中山道会館 をめぐりました。

《中学校》  
◆伝統文化を学ぶ会

一刀彫

中野 唯密さん

華道

村田美代子さん

美濃焼

佐藤公一郎さん

郷土料理

可兒 純子さん  
丹羽まりこさん  
田中 康子さん

茶道

高橋そのこさん  
丹羽 捷子さん

水墨画、絵手紙

竹内 照子さん  
川合 直子さん

箏笛

田中 敬長さん

将棋・囲碁

シニア囲碁クラブ  
シニアなまかし将棋クラブの皆さん

浴衣の着付け  
盆踊り

丹羽真理子さん  
三品 早苗さん  
佐藤 圭司さん  
佐藤きみ子さん  
三品智恵子さん

坂祝町コミュニティ・スクール新聞 令和5年10月

【多文化共生委員会】  
◆国際教室での学習支援

日本に来て日本語の習得がまだ十分ではないために学習に困り感をもっている外国籍の子が複数います。国際教室の担当の先生や通訳の先生がきめ細かに指導をしていますが、多くの子どもたちを指導する時があります。そうした時には、梅田千枝子さん(池城)が応援に来ています。コロナ禍の落ち着いてきたこともあり、日本に来たばかりの児童生徒が増えました。そうした児童に自作資料で日本語を教えてくださっています。

◆放課後学習会

外国籍児童を中心に始まった小学校での放課後学習会ですが、3年前から日本人の1年生の子も参加しています。月に1回から2回のペースで月曜日の放課後の3時15分から4時半まで学校の一部屋を借りて学習を行っています。主に宿題を中心に行っています。わからないことを教えてもらって終わると満足げな表情をしています。保護者からは「正しい音読ができていないか不安なので助かっています。」というご意見をいただいています。現在のボランティアの登録者は、梅田千枝子さん(池城)三品俊彦さん(取組)小島光子さん(勝山)浦田伸司さん(酒倉)山田千登英さん(酒倉)兼松剛子さん(酒倉)山岡善子さん(取組)宮内聡樹さん(加茂山)長谷川ますみさん(黒岩)兼松都希子さん(酒倉)の10名で小学校の支援をしてくださっています。

◆すまいるひろば

10月29日(日)中央公民館にて「すまいるひろば」が行われました。「すまいるひろば」では、日本の文化を学んだり、学習をしたりしていますが、この日は、参加者が和太鼓をたく体験を順番にやりました。太鼓のたたき方を学んだ後、お祭りのお囃子に合わせてたたきました。また、紅白の壺れ暴やちようちんについても学びました。休憩後は学年に応じた学習をしたり、国語はひらがなの勉強をしました。参加者からは「楽しかった。」と、好評でした。

【地域・スポーツ委員会】

10月15日(日)に第2回スポーツレクリエーションフェスティバルが開催されました。体育協会などの出展と合わせて、スポーツ少年団(野球、バレー、サッカー)や坂中クラブ(ソフトテニス、卓球、バスケ、サッカー)が主体となった出展もありました。幼児から高齢者まで楽しめる楽しい活動が準備されていました。特に幼児には優しく語りかけ、うまくいった人たちには一緒に喜んであげる姿がありました。

CS新聞 10月号

-1面-

## (2) コミュニティスクールの合言葉作成

コミュニティスクールでは、学校や保護者だけでなく、地域も一緒に子どもたちの健やかな育成を願っている。5年前には「育もう 未来の芽と郷土愛 ～地域の中に園・学校を 園・学校の中に地域を～」というスローガンのもとスタートし、地域の方々が一体となって子どもたちに郷土愛を育んでいる。今回、「子どもたちにもわかりやすい合言葉」という願いで、各委員から募集し下記のように決まった。学校や保護者、地域の活動の中でも活用している。



### 【言葉に込めた思い】

- ・「だいすき」は園児、小学校の子どもたちでも読めてなじみやすい言葉。
- ・「SAKAHOGI」は多文化で外国人児童生徒にも共有できる表記。
- ・地域を大好きになってほしいという意味をシンプルに表現。
- ・「だいすき」の後の「!」を入れることで、より好きになってほしいという強い意味を込めた。

## (3) 坂祝小中学校新規転入職員の町内巡り

8月21日(月)に今年度坂祝町の小中学校に新しく赴任された先生方を対象にした坂祝町の町内巡りをを行った。史跡や企業を回り、坂祝町の



小西碎石



坂祝町子育て支援拠点施設

ことを知っていただくことで、子どもたちへの学習に生かしてほしいというねらいからである。暑い日ではあったが、熱心に坂祝のことを学んでいた。コースは、坂祝神社→火塚古墳→岩谷観音→小西碎石→坂祝町子育て支援拠点施設バンビーニ→猿啄城の麓→十二社神社→若林煎餅である。

## (4) 坂祝だいすきの具現

### 「あいさつの輪を広げよう」

坂祝町コミュニティスクールとして、何か一つのことを、みんなで取り組めることはないかと話し合った。そこで「あいさつの輪を広げよう」と題し、毎月1日は「あいさつ運動の日」として取り組むことになった。以下は、コミュニティスクール新聞より抜粋したものになるが、コミュニティスクール委員はもとより地域住民にも周知し、町全体で取り組んでいる。

**あいさつの輪を広げよう** CS新聞5月号

毎月1日は「あいさつ運動の日」

小学校、校長先生の経営方針の中に「坂祝だいすき」な子にしたいという内容がありました。そのためには、地域の方々との顔見知りになることが大事であり、その手段の一つとして挨拶を大事にしたいということでした。その思いを受けて、協議本部の3部会で挨拶について話題にしてみました。その結果、月1回の「あいさつ運動」にCSも参加することになりました。地域の皆様も、毎月1日には家の前などで出会った子どもたちと挨拶を交わしていただけたいと思います。顔見知りになることで、子どもたちは安心と安全な地域で過ごすことができます。ご協力をよろしくお願いいたします。

**あいさつの輪を広げよう** CS新聞8月号

毎月1日は「あいさつ運動の日」

「あいさつ運動」のご協力ありがとうございます。青少年育成町民会議の方々と一緒に運動に参加して下さる方や、ご都合のつく時間に、登下校の子どもたちにあいさつを呼びかけて下さる方など、いろいろな形で参加して下さりありがとうございます。そうした姿は子どもたちの進んであいさつをする姿になって表れてきています。今後ともよろしくお願ひします。

**あいさつの輪を広げよう** CS新聞11月号

毎月1日は「あいさつ運動の日」

毎月初めに学校で行われている『あいさつ活動』にCSが参加するようになって半年以上が経ちました。「あいさつを通して子どもたちと地域の大人たちが顔見知りになること」を大事に取り進んでいます。おかげさまで、11月のCSでは「子どもたちのあいさつがよくなってきた。」という意見ができました。私たち大人も、家庭や職場・地域などいつでもどこでも気持ちの良いあいさつができていますか、一度自らを振り返ってみてはいかがでしょうか。日に日に寒くなってきました。お身体に気を付けて引き続き皆様のご協力をお願いします。

## 3 終わりに

坂祝町のコミュニティスクールは5年目を迎え、一つひとつの課題を解決しながら、着実に成果を上げてきた。今後も、坂祝町のすべての子どもたちが「だいすき! SAKAHOGI」になるために、一人でも多くの地域や保護者の方々にご理解とご協力をいただき進めていきたい。



## 2. めざすこどもの姿

川辺町でのめざす子どもの姿

**心身ともに健康で、郷土を愛する人間性豊かな子ども  
～わたしが好き 家族が好き 仲間が好き そして この町が好き～**

また、今年度の重点とし、「ふれあいがひろがる町“かわべ”をめざして」とし、地域・家庭と連携して活動できるように進めています。川辺町では、コミュニティスクールをより一層加速させ、子どもを中心に置き、学校・家庭・地域が協働して、町づくり・地域づくりを推進していけるよう考えています。その実践について紹介します。

## 3. 実践の紹介 「あらたまの日」小学校：12月2日（土）、中学校：11月28日（火）

### (1)川辺西小学校「地域大活躍 人的資源の活用」

学年ごとに活動が決まっており、地域の方がそれぞれ講師となり進めていただきました。ものづくり活動では、クリスマスリースの飾りつけやじゅず玉作り、竹細工を行いました。また、防災や川辺の歴史についてくわしく話を聞いたり、川辺かるたなどのゲームやスポーツを楽しんだりする活動も行いました。地域の方がいきいきと子どもたちに携わる姿や保護者が自ら積極的に活動に参加する姿は、これまでのコミュニティスクールとして進めてこれた成果の一つでした。また、講師の先生との打ち合わせを各学年の担任が進めたことも、教職員がコミュニティスクールへの理解を深めるきっかけとなりました。



### (2)川辺東小学校「地域、家庭が協働 ウィンターライブ」



1時間の授業参観が行われた後、体育館にて「キングダム ウィンターライブ」を行いました。この取り組みは、川辺東小学校 PTA 研修委員会が主催しました。また、演奏会は、日頃より支援員として川辺町で子どもたちの指導に携わっている先生が主体となって進めました。フルート・クラリネット・トランペット・電子ピアノ等を用いて、様々な演奏が行われました。子どもたちと家庭、地域が一体となって楽しみ、充実した活動となりました。川辺町のめざす子どもの姿、郷土を愛する子どもたちに近づけることができた活動となりました。

### (3)川辺北小学校「人どうしが協働することの大切さを知る 人権集会」

毎年、行われていた人権集会をこのあらたまの日で行いました。まずは、児童会において、子どもたちが人権意識を高めるための活動を堂々と全校の前で発表しました。子どもたちの活躍する姿を保護者や地域で見守りました。その後、子どもたちが企画した、「人権」「人つながり」に関わるレクリエーションを川辺町長や議員、一般の方、教職員も参加し一緒に行いました。普段、話したことがない人とも、子どもたちは積極的に関わり、夢中になって楽しんでいました。



## 4. 終わりに

川辺町では、「あらたまプラン推進協議会」を年2回行っている。園・学校関係者だけではなく、民生委員、社会教育委員、区長等、多くの地域の方々に参加して頂いています。子どもたちのためにできることを議論することを通して、今後もよりよい地域づくりを進めていきます。また、数年後に計画されている学校統合に向けても念頭に置きながら、地域・家庭・学校が一体となって、議論を進めていくことが必要となります。町全体が心身ともに健康であり続けるとともに、町民すべての理解と協力を求め、連携し続けることができるよう働きかけていきます。

川辺町の子どもたちが、地域の担い手の一人一人になっていけるよう今後も活動を進めてまいります。



# 『人道のまち やおつ』を合言葉に ～夢・志を育む人道教育の推進～



八百津町教育委員会

## 1. 元外交官杉原千畝氏のゆかりの地、「八百津町」

1940年、ナチス・ドイツの迫害から逃れてきたユダヤ人たちが、日本の通過ビザを求め、領事館前に押しかけました。日本の命令に従って外交官としてビザを発給しないか、ユダヤ人の命を救うためにビザを発給するか、千畝は悩みに悩み、一つの答えを出しました。自分の良心に従い、2139通に及ぶビザを発給しました。



「一晩中、私は考えた。考えつくした。私のしたことは、外交官として間違ったことだったかもしれない。しかし、私には頼ってきた何千人もの人を見殺しにすることはできなかった。大したことをしたわけではない。当然のことをしただけです。」

ビザを発給することで自分自身の命だけでなく、家族の命にも危険を及ぼすことも考えられる中、千畝氏のとった勇気ある決断と行動は後世に語り継がれるようになりました。

そのような千畝氏の人道行為を取り上げ、八百津町では、『人道のまち やおつ』を合言葉に、千畝氏の温かい人間愛の精神のもと、世界平和の大切さ、命の尊さ、思いやりの心を育むことに力を入れています。

## 2. 杉原千畝氏から繋がった交流事業

千畝氏の功績から、八百津町では『人権教育』を『人道教育』として取り組んでいます。そんな中、千畝氏を通じて数々の交流事業を行っております。

### (1) 杉原ウィーク、杉原千畝記念短歌大会

杉原千畝氏の遺徳を偲び、「いのち・平和」の大切さを再確認するため、杉原氏の命日である7月31日を含んだ一週間を「杉原ウィーク」と称して、平和を願う様々なイベントを開催しています。その中の一つとして、2000年より短歌大会を開催しています。杉原氏の妻、幸子氏が短歌を嗜んでいたことから、短歌を通して平和を伝える事業として取り組んでいます。当短歌大会を通してたくさんの方が杉原千畝氏のことを知り、平和を考え、平和を願うというところを目的とし、現在は町内のみならず、国内、海外からも多くの募集をいただいています。令和5年度は総数2963首のもの応募がありました。

### (2) 八百津町児童生徒会サミット

町内の4つの小学校と2つの中学校の代表者が参加する、「児童生徒会サミット」を開催しています。第1回のサミットで「人道の町 八百津から いじめをなくす撲滅宣言」が提言され、毎年各学校での取り組みが交流されています。命を大切にし、人の痛みがわかる学校づくり、いじめのない学校づくりを目指して実施しております。近年はオンラインによる会議を実施しております。



児童生徒会サミットの様子

### (3) 八百津町・早稲田大学文化交流事業

杉原千畝氏の母校である早稲田大学とは長年にわたり交流事業を実施しております。令和5年度は、男声合唱団の「早稲田大学グリークラブ」をお招きし、中学生との合唱交流を実施しました。コロナ禍の影響で、本格的な合唱に触れることができなかった中学生にとって、早稲田大学の学生との交流はとても刺激的なものとなりました。また、中学生のみならず、町民に向けたものとして、「ワセダヒューマニティコンサート」を開催いたしました。会場には八百津町のみならず、県外からも来られ、迫力ある合唱に魅了されていました。本事業を通じて、生徒のみならず町民とも文化的なつながりを大切にしております。



ワセダヒューマニティコンサートの様子

### (4) リトアニア・カウナス市との交流事業

千畝氏がビザを発給した地、リトアニアのカウナス市との交流をしています。令和5年度は、町内にある4つの保育園が協力し、日本とリトアニアの保育園や幼稚園の行事や文化について、動画にまとめ鑑賞し合っています。お互いの国について興味や関心をもち、お互いの良さを認め合う活動を目指しています。

また、小中学校の取り組みとして、「ブリッジプロジェクト」を行っております。日本とリトアニアの子どもたちの「言葉のいらない心の交流」を図ることを目的として、アートプロジェクトを実施しました。「小さな友情の架け橋」をテーマに、橋の半分を八百津町の子どもたちが画用紙に描き、リトアニアに送ります。残りの半分をリトアニアの子どもたちが描き一つの橋の友情の架け橋が完成します。12月に約120点の作品を送りました。リトアニアの子どもたちとの共同作品がどう仕上がるか楽しみです。



八百津町の子どもたちが描いた橋

## 3. 『人道精神』が実を結び、生まれた合唱曲『心のピース』

児童生徒の『人道精神』を育んできたことで、八百津町の宝が一つ増えました。令和3年度の杉原千畝記念短歌大会において、八百津中の生徒が詠んだ短歌が大賞を受賞しました。

「平和とは パズルのように チグハグだ 一瞬にして 世界が変わる」

この作品を基にして、八百津中と八百津東部中の生徒が「人道の歌」の作曲に挑みました。生徒たちがタブレット端末の鍵盤などを使ってメロディーを考えました。作曲した生徒は「平和への思いを込めて力強いメロディーにしたい。」など、自分たちの曲に心を込めて作成していました。その後、岐阜大学教育学部の西尾洋准教授が編曲し、合唱曲『心のピース』が完成しました。

現在、この合唱曲は八百津町内のすべての学校で歌われています。この曲を歌うことで、八百津町の子どもたちが、八百津を愛し、八百津を大切にできる、ふるさと愛する心や、人道精神を高めてくれたらよいと願っています。

今後も、「人道のまち やおつ」として人道教育を進めるべく、充実した日常、様々な体験事業を展開していきたいです。



# 文化祭における地域学校協働活動

東白川村教育委員会

## 1 はじめに

2年に1回の研究調査掲載の機会に、本村の人口等の推移を確認している。今回、過去2回からの変化を見た。結果は以下のようである。(左から順に、本年度←R3←R1の11月時点での数値)

◇世帯数…826世帯 ← 817世帯 ← 831世帯 (プラス9世帯 ← マイナス14世帯)

◇人口……2,080人 ← 2,135人 ← 2,217人 (マイナス55人 ← マイナス82人)、

◇子どもの数…保育園年少～年長 32人 ← 33人 ← 35人 (マイナス1人 ← マイナス2人)

小学生 70人 ← 78人 ← 79人 (マイナス8人 ← マイナス1人)

中学生 39人 ← 39人 ← 44人 (プラマイ0人 ← マイナス5人)

高齢化率が45%と高いため、人口の減り方は著しいが、村の移住定住政策の効果もあってか、世帯数は若干増えている。ただ、それでも残念ながら、子どもの数はじわじわと減っている。

## 2 昔からある様々な地域学校協働活動

小さな村がさらに小さくなっていく現状なので、教育委員会事務局職員の数も前年よりさらに1名減り、教育長を含めて7名に。加えて、コロナ感染症の扱いが軽くなって行事がかつてのレベルに回復したことにより、忙しさはさらに増した。しかし、村の子どもや大人たちが元気に楽しく学んだり活動したりする場や方法を提供・提案できるように全職員でがんばっている。

村では、昔から「子どもは村の宝」を合言葉のようにして、地域と学校がお互いの活動に協力し合うことで、子どもを育ててきた。こうした活動は、「郷土歌舞伎公演」「緑化少年団」「小学校全校登山」「カヌー教室」など、たくさんあるが、今回は、「文化祭」について紹介する。

## 3 実践……村の文化祭に中学校の合唱を位置付ける

村の文化祭は、文化協会主催の行事で、毎年11月2日と3日(文化の日)の2日間、開催される。1日目は、文化展のみの開催、2日目はそれに芸能発表が加わる。文化展にしる、芸能発表にしる、文化祭は1年間の活動の成果を披露する場である。

### (1) 文化展

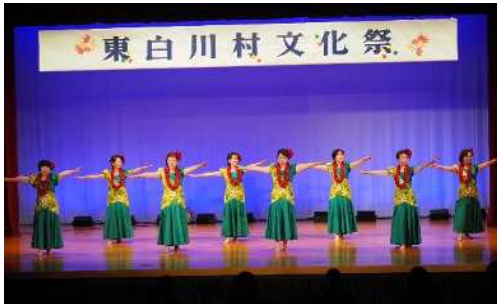
文化協会登録のサークルとしては、「山野草」「写真」「手芸」「俳句」などがあり、このほかにも個人やグループによる出展も認められている。絵手紙、絵画、書などのほか、ジオラマや紙粘土を使った造形作品などの出展もあって、思わず見入ってしまうほどの力作ぞろいである。また、保育園、小学校、中学校、福祉施設などからも、絵画を中心に展覧される。

### (2) 芸能発表会

芸能発表会は、2日目の午前のみで開催である。「女声合唱」「吹奏楽」「和太鼓」「フラダンス」「大正琴」のサークルが日ごろの練習の成果を発表する。かつては、民謡(踊りや唄)、詩吟などもあったが、時代の流れとともに無くなった。

<文化展の様子>





コロナ禍真っ只中の頃には、芸能発表会の存続が危ぶまれた。練習不足に加え、生演奏ができないため、過去の対外演奏会に出場した時などのビデオを大きなスクリーンに映し出して、その場をしのいだ。今年は、女声合唱団も4年ぶりに出場し、全サークルの演奏発表ができた。

とはいえ、かつてのような賑わいがなくなっているのが現状で、その窮地を救ってくれたのが、中学生の合唱である。

昨年度から東白川中学校が芸能発表会に参加し、全校合唱と学年ごとの合唱を披露してくれるようになった。中学校はこの日は授業日扱いで、午前中は芸能発表会で合唱披露と他のサークルの演奏を鑑賞し、午後からは文化展を見学した後、学校に戻っていく。今年から、伝統の加茂郡中学校音楽会が4年ぶりに再開されたこともあり、中学生にとっては、文化祭での合唱披露は、絶好のリハーサル場となった。また、親、近所の大人が演奏する姿や彼らの出展作品を間近に見て、大人たちの新たな一面を発見する機会となった。さらに、自分たちの合唱を多くの人に喜んで聞いてもらえたことで充実感を味わえた。主催者側にとっては、中学生の保護者や家族が多く訪れることで賑わいが増し、中身の濃い内容となった。学校にも地域にも一挙両得の行事となった。



<村の文化祭で中学生が合唱披露>

### (3) 今後の展開

来年度からは、新しい試みとして文化祭と産業祭（秋フェスタ）をドッキングすることにした。文化祭に訪れる人と産業祭に訪れる人は、客層が異なっており、両方を同時に実施することで集客の増加を図るといふねらいがある。買い物や飲食、展示やステージ演奏などを幅広く楽しみ、多くの村民が集える場となればよい。また、文化協会のサークル会員の新規増加につながれば、これほどうれしいことはない。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

今回、地域の活動（社会教育活動）に学校や子どもを取り込むことで、行事の盛り上がり、地域の活性化、子どもの見聞を広げることにつながった。

### (2) 課題

文化祭に限ったことではないが、まだ、教育委員会が音頭取りをしたり、事務を引き受けたりしないと開催に至らない行事が多い。教育委員会の手を離れ、メンバーだけで企画や運営ができるようになることを目指したい。

## 5 最後に

地域と学校が相互に関わる取り組みを充実させることが、子どもたちの「地域や社会をよくするために役立ちたい」という意識の醸成につながっている。かつて「村の宝」として育てられた子どもたちは、現在、その思いを引き継ぐ大人になり、地域の一員として村の子どもたちに関わってくれている。今の子どもたちも、きっと大人になったときには、何らかの形でこの村を支えていく存在になっていくことと思う。

# コロナ禍明けての結の屋根葺き

大野郡白川村教育委員会

## はじめに

令和5年5月13日（土）白川村の世界遺産荻町合掌集落内の明善寺庫裡において結の屋根葺きが実施されました。令和2年よりコロナ禍に突入し、5年ぶりというかなりの期間が空いての結となってしまいました。当日は160人の村民の参加で実施され、久しぶりに集落内に「ホーイ、ホイッ」とカケヤを振り下ろす掛け声が響き渡り、ようやくコロナも明けたなと実感できた一日でした。明善寺では平成8年の東面の屋根葺き以来で、今回の西面の屋根葺きも大泉住職の強い思いで結の屋根葺きが実現しました。



## 1. 若手の屋根葺き技術育成

今回は期間が空いての結だったため、事前に若手住民を対象とした屋根葺き講習会を地元の住民保存会、白川郷荻町集落の自然環境を守る会（以下守る会）主催で実施し屋根葺き本番に臨みました。合掌造りでは屋根葺きの際に合掌材とヤナカ（母屋材）を結束する縄も一緒に取り換えますが、その「ハコ巻き」の結び方や、茅を押さえるヌイボクの留めかた等を研修しました。研修を受けた若手の中には初めて屋根葺きを経験する世代の研修生もいて、職人さんから一生賢明縄の結び方を習っていました。久しぶりの結の機会です事前に意識を高めるためにも良い講習会となりました。



## 2. 結の屋根葺き当日

5月13日の屋根葺き当日を迎え朝8時前に続々と村の人々が集まってきます。施主である大泉住職の挨拶のあと、赤い法被を羽織った世話役の方の説明があり、各々持ち場につきます。若手を中心に屋根に登れる人は屋根にとりつき、その他の人たちは軒下から屋根に茅を送りだします。白川村ではふるさと教育の一貫として結の屋根葺きの際には白川郷学園の生徒に参加を促し、公募制で屋根葺きに参加してもらいます。今回も29名の生徒が参加し、大人たちに手渡しで茅をバケツリレーしていきます。

今回の屋根葺きで印象的だったのは、屋根の内側で作業をする「ハリサシ」の持ち場での若手の姿勢でした。ハリサシは通常経験のある熟練年長者が入りますが、そこにハリサシ未経験の若手がついて積極的にハリサ



シのやり方を習得していました。ハリサシというのは茅を押さえるヌイボク（押し鉾）とクダリ（垂木）を結束するための縫い縄を屋根の内側で受け取ってクダリに縄をかける役割の人です。ハリサシは屋根の内側からヌイバリを外側のヌイボク付近に目がけて刺し、外側の葺き師がヌイボクにかけた縫い縄をその針先に通し「あーい」と言っ



て針先をたたいてオッケーの合図をだします。内側のハリサシは合図を受けてハリを引き抜き、クダリ（垂木）に縄をかけて再度外側にハリを刺し外側の葺き師に縄を渡します。ハリを刺す際に外側のヌイボクの位置にあたりをつけるのが難しく、若手は年長者に聞きながら熱心に取り組んでいました。

外では葺き師が縄を引っ張りヌイボクを足で踏んでカケヤで叩いてもらい縄を絞め「ワサン」と「ツノ結び」という結び方で縄を結びます。その「ワサン」と「ツノ結び」の結び方も事前の屋根葺き講習会で研修したため、そこで教わったことを思い出しながら若手が頑張っている姿が見られました。

### 3. 現代社会における結の存続の難しさ

今年は久しぶりに結の屋根葺きを実施することができましたが、以前と比べると結の屋根葺きを実施していただける家が少なくなってきたことは否めません。これは単に白川村だけの問題で片付けられるものではなく、現代の社会の問題と併せて考えていく必要があると思います。地域のつながりや隣人との関係性が薄れていく一方で SNS 等のネットメディアを主体とした相互交流が主流になりつつある日本の社会の中で世代間の考え方の違いというのは我々の想像を超えるものがあると思います。結のみで屋根の葺き替えを実施していた五十年前の社会の状況とは全く変わってしまっている現代において、かろうじて今のやり方で結が実施できていること自体、奇跡的なことではないかと感じています。なのでこの状況を逆手に、唯一残された結の屋根葺き文化を積極的に村の魅力として発信していくという、今までとは別の視点で結の価値を共有して取り組むことも必要だと考えています。

### 4. 白川郷学園のふるさと学習

白川村では将来の担い手の土台を学ぶ学習として村民学に取り組んでいます。その村民学の中のふるさと学習の一貫で4年生が毎年合掌造りをテーマに学習します。授業は主に「①実物合掌造り見学、②屋根葺き現場で生の職人さんの声を聞く、③茅場等資材確保の現場見学、④合掌造りの伝統的な縄の結束方法「ハコ巻き」の習得、⑤最後に合掌造りの実物と同じ原寸の小屋組み模型を、茅葺き職人さん指導のもと、ハコ巻き技術を使って組み立てる。」といったことを行っています。最後の組み立ての授業では大勢で一つのモノを作り上げる結の共同作業の魅力や大切さに意識をもってもらえるよう、友達と常に声を掛け合っ

